

鳥類相の概要

本県では現在までに、18目63科303種の鳥類が観察されている。高山帯では、天然記念物のライチョウをはじめ、イワヒバリ・ホシガラスなどを見ることができる。県土の約82%を森林が占めていることもあって、丘陵帯から亜高山帯まで多くの森林性の鳥類が生息している。亜高山帯針葉樹林ではコマドリやルリビタキ・ヒガラなどが繁殖している。山地帯下部位置や丘陵帯において山地が平野部と接するあたりは里山とも呼ばれ、オオタカ・フクロウ・キジ・ホオジロ・ウグイスなど多くの鳥を見ることができる。河川流域では、様々な水辺の鳥が生息し、上流域ではヤマセミ・カワガラス・オシドリなど、中流域の中洲ではイカルチドリ・イソシギ・コアジサシなどが繁殖する。セキレイ類やサギ類も多く、近年はかなり上流域までカワウの姿が見られるようになった。木曽・長良・揖斐の三川下流域では、冬季、マガモ・コガモ・ハシビロガモなど万を超すカモ類が越冬する他、カンムリカイツブリや稀にコハクチョウの姿を見ることができる。県全体で越冬するカモ類は約3万羽である。平野部においては農耕地でヒバリやケリが繁殖し、春と秋の渡りの時期には、少数ながらシギやチドリの仲間が羽を休めていく。街中ではヒヨドリ・キジバト・カワラヒワなどが繁殖しているが、近年、カラス類の増加が目立つ。このように、四季折々、様々な鳥類が生息する県土であるが、開発や環境の悪化によって生息地が脅かされている鳥も多く、適切な保全対策が必要とされている。また、特定外来種であるソウシチョウが最近、岐阜市や多治見市で確認されるようになった。今のところ定着はしていないようだが、今後の動向に注意する必要がある。

選定種の状況

鳥類は移動（渡り）を行うことにより、季節によって生息する種が異なっているのが大きな特徴である。大別すると、一年中同じ地域で見ることができる種（留鳥）、国内において短い距離を移動する種（漂鳥）、春から夏にか

けて見られる種（夏鳥）、秋から春に見られる種（冬鳥）、渡りの途中で一時的に見られる種（旅鳥）、本来の生息地から離れているが稀に見られる種（迷鳥）に分類することができる。これらは地域によっても異なり、ある地域では留鳥であっても別の地域では夏鳥になることがある。

今回、選定にあたり、基本的には「県内で繁殖している」または「繁殖の可能性はある」種を対象とした。主に留鳥や漂鳥、夏鳥である。県内で越冬する冬鳥や通過するだけの旅鳥は、年によって数の変動が大きく、増減を判断するには長期間の調査が必要であり対象外とした。今後は重要な越冬地の保全を考えていくことも大切な課題である。選定の結果、絶滅危惧Ⅰ類5種、絶滅危惧Ⅱ類7種、準絶滅危惧21種、情報不足8種の計41種となった。

絶滅危惧Ⅰ類のライチョウは標高2,300m以上の高山帯に生息し、氷河期の遺存種「生きた化石」と言われ、本県の県鳥にも指定されている。北アルプス、南アルプスなどに約3,000羽が生息していると推定されているが、近年、登山者の増加、生息環境の悪化などにより、その数の減少が報告されている。また、地球温暖化による生息環境への影響も懸念されている。イヌワシは国内最大の猛禽類で、数十km四方の広大な行動圏を持ち、ヤマドリやノウサギを食している。もともと数が少ない上、生息環境の悪化、餌動物の減少などの原因で近年繁殖率が著しく低下し、生息数は400羽ともそれ以下とも言われている。ブッポウソウは美濃市洲原神社がその渡来地として天然記念物に指定されているものの、1970年代を最後に飛来は確認されていない。現在では揖斐川上流域や白山山麓などに局地的に見られるだけである。チゴモズ・アカモズは夏鳥として飛来し、県内では高山市周辺で繁殖していたが、最近では生息が確認されておらず、全国的にも数の減少が言われている。

絶滅危惧Ⅱ類のクマタカや準絶滅危惧のハチクマ・オオタカ・ハイタカに加え、今回新たにサシバ・ハヤブサのタカ科及びハヤブサ科の鳥を選定した。一般に猛禽類と呼ばれるこれらの鳥は、食物連鎖の頂点にあり、生息環境が悪化することにより即座に影響を受け、環境を指標する鳥であると言える。クマタカは主に標高500m以上の森林に生息するが、近年、山岳地帯の開発

や林道、ダム建設などによる営巣環境への影響が懸念されている。全国的に繁殖率が低下しているという報告もある。ハチクマ・オオタカ・ハイタカ・サシバは、クマタカより低い標高域の森林に生息しており、生息地が人里に近いこともあって開発や人間生活との共存が大きな課題となっている。ハヤブサは本来、海岸の断崖に繁殖する鳥であるが、近年、内陸部でも繁殖が確認されるようになった。フクロウ科の鳥は小鳥、小型哺乳類、昆虫などを食し、夜の猛禽類とも呼ばれている。タカ科同様、食物連鎖の上位を占める種である。コノハズクは、特徴的な鳴き声から「仏法僧」とも呼ばれているが、近年、その声が聞かれなくなっている。フクロウやアオバズクは、大木の樹洞で繁殖する種であり、そのような環境を保全するようしなければならない。ヤマドリは近年、その数が減少し日本固有の鳥であることからして、適切な保全対策が望まれる。

オオジシギは、飛騨地方の高原の湿地に局地的に飛来するが、毎年確実に見られるのは郡上市高鷲町蛭ヶ野高原だけである。高原の牧草地などで繁殖するホオアカも年々数が減少している。ミゾゴイ・ヨタカ・サンショウクイ・センダイムシクイ・コサメビタキ・サンコウチョウなどは、夏鳥として丘陵帯から山地帯下部の森林に飛来し、以前は都市周辺の林や緑の多い公園でも繁殖していたが、近年は見る機会が少なくなってきた。これら里山環境に生息する鳥の減少は、様々な開発や人間活動に影響を受けることが多いが、越冬地における環境問題とも関係しているのかもしれない。

水辺に生息する鳥のうち、コアジサシ・シロチドリは海岸の砂地や河川の中洲、河原で繁殖する。埋め立てによる自然海岸や干潟の減少がこれらの鳥の繁殖に大きな影響を与えてきたと言われている。県内では美濃地方の河川中流域から下流域にかけて繁殖しているが、増水による繁殖地の水没やレジャー車の河原への乗り入れで繁殖が安定していない。カイツブリ・ヒクイナ・ヨシゴイなどは池や河畔のヨシ原で繁殖する鳥であるが、護岸工事などで広大なヨシ原がなくなり、その生息地が著しく減少してきている。タマシギは、平野部の休耕田で少数が繁殖しているだけである。河川上流域に生息する鳥

として、オシドリ・アカショウビン・ヤマセミを選定した。近年、数が減少している原因として河川流域の自然環境が悪化していることに加え、上流域まで人が入り込むようになったことも関係していると思われる。

なお、鳥類の移動範囲は広域にわたるため、今回のメッシュ分布図では、明らかに渡りの途中と思われるものは除いた。

鳥類各種のページこちら

http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11264/sizen/red_data2/bird.html